

# 風土記の丘の花だより<sup>326</sup>

今、そしてこれから見られる植物(2026年6月20日)

晴れ間はあるものの、梅雨らしい蒸し暑い天気が続きます。アジサイの花の色が少し鮮やかになってきたように感じます。それにオレンジ色のアクセントを添えるヤブカンゾウのつぼみが上がってきました。開花が楽しみです。



万葉植物園でネムノキが咲いています。これをご覧になるころには下にたくさんの花が落ちていることでしょう。「昼は咲き 夜は恋ひぬる ねぶの花 君のみ見めや わけさへに見よ」という紀郎女(きのいらつめ)の歌が万葉集に残されています。この歌からも分かるように、ネムノキの葉は夜になると閉じてしまいます。でも、オジギソウみたいに触っただけで閉じることはありません。そのようなすを「眠る」と感じ取る感性がステキですね。



細長い茎にピンク色の小さな花を螺旋状に付けるネジバナが咲いています。小早川家住宅の庭には群生が見られます。名前にはランと付きませんがランの仲間です。芝生との相性がよく、公園やグラウンド、中央分離帯などでも普通に見られます。野生ランの多くは環境破壊や盗掘があとを絶たず、いろいろな種が絶滅に瀕していますが、このランだけはそれにも負けずいろいろな所で私たちの目を楽しませてくれています。せめてこの野生ランだけは私たちのちょっとした気配りで守っていききたいものです。



アガパンサスがやっと咲き始めました。「やっと」と書きましたが、花茎が上がってきて、つぼみが膨らんでから2週間ほどかかっただけの「やっと」です。こんなに日数がかかるものだと改めて思いました。アフリカ原産で、日本には明治時代の中頃に入ってきて、園芸植物として定着しました。はじめはクンシランの仲間と思われ、ムラサキクンシランと呼ばれたようですが、クンシランはヒガンバナ科、アガパンサスはユリ科なので、その呼び名は普及しなかったようですね。ギリシア語で、愛の花という意味だそうですよ。



鮮やかな青い花、ツユクサが咲き始めました。青い花は野外では少ないので、よく目立ちます。黄色いおしべがさらに青色を引き立てています。でも、全ての雄しべが黄色いわけではありません。下の方に長く伸びているめしべの近くには黄色くないおしべがあります。何気ないごく身近な野の花ですが、花のつくりはちょっと興味深いものがあります。万葉の昔は「つきくさ」と呼ばれ、染め物に使ったそうですが、すぐに色が褪せるのが欠点だったそうです。 松下